

〔討論〕

下顎切歯部の異常歯についての討論

高橋正志*

「癒合歯の成因に関する一考察」(小寺, 1979)と「ヒトの下顎切歯部の退化過程に関する一考察」(高橋・小林, 1986)の相違点について誌上討論するように編集部から要請があったので, 多少の意見を述べてみたい。

筆者らの小論の概要

下顎切歯部の過剰歯, 矮小歯, 癒合歯, 中切歯の欠如および乳切歯の晩期残存の症例における歯および顎骨の形態を比較検討し, 下顎切歯部の退化過程に関する次のような一仮説を示した。

各症例における顎骨の形態の比較から, 下顎切歯部の退化の主因を顎骨の縮小による切歯化の場の縮小と考えた。まず, 少し切歯化の場が縮小した場合には下顎中切歯の矮小歯が形成される。さらに縮小すると, もはや切歯化の場には2個の歯胚が入りきれないが1個の歯胚のためには広すぎるので, 少し大きな歯が形成され, 場の作用により近心半が中切歯の形態を, 遠心半が側切歯の形態を形成したために, あたかも中切歯と側切歯が癒合したような形態の歯が形成される。さらに縮小すると, 浅い境界の溝を残す癒合歯の段階をへて, 最後には正常な場合の側切歯とまったく同じ形態の1本の切歯しか形成されなくなる。

以上の筆者らの仮説の最大の根拠は, 下顎中切歯が欠如する場合に晩期残存する歯は従来乳中切歯であると考えられてきたが, これが乳側切歯であると気付いた点である。つまり, 中切歯が欠如する場合には先行する乳中切歯も欠如していたのである。

両者の考えのちがひ

両者の考えは, 癒合歯が1個の歯胚から形成されるという点で一致する。しかし, その原因を歯胚数の減少と考えるか, 切歯化の場の縮小と考えるかという点で異なるように思われる。具体的の下顎中切歯と側切歯の癒合歯について考えてみると, 高橋ら説によればこれが正中

より1個目の歯胚によって形成されることになるが, 小寺説によれば正中より1個目の歯胚が欠如して2個目の歯胚によって形成されても良いことになる。

筆者らの意見

哺乳類の基本歯式では, 切歯が3本, 犬歯が1本, 小臼歯が4本, 大臼歯が3本といわれているので, 小寺説に従えば, 正常なヒトの場合でも, 常に切歯部で1個, 小臼歯部で2個の歯胚の欠如を考えなければならないが, ヒトの歯列の個体発生においてそのような徴候がみられるのであろうか。

また, 小寺説では場の変化を考えていないので, 癒合歯の成因を説明できても, 下顎中切歯と乳中切歯の欠如の例を説明できない, と思われる。つまり, この場合に正中より1個目に形成される歯は, 正常な場合の側切歯および乳側切歯であり, けっして中切歯と側切歯の中間形および乳中切歯と乳側切歯の中間形ではないのである。この現象は筆者らのように切歯化の場のうちの近心部の縮小を仮定すれば合理的に説明できる, と思われる。

おわりに, 筆者らは下顎切歯部の異常歯の症例について検討し, 主観的にはまったく独自に下顎切歯部の退化過程に関する一仮説を抽象したつもりでいたが, 客観的には井尻・菅沼(1943)の歯胚の移植実験の結果をヒトの下顎切歯部の退化過程に応用したにすぎなかったように思う。

文献

- 井尻正二・菅沼音一(1943)犬に於ける歯胚の移植実験. 口病誌, 17, 293-301.
 小寺春人(1979)癒合歯の成因に関する一考察. 化石研究会誌, 12, 7-13.
 高橋正志・小林 寛(1986)ヒトの下顎切歯部の退化過程に関する一考察. 歯学, 74(2), 391-403.